

税は、未来を守る力だ。そう思うようになったのは、奈良で暮らす私が、この町の歴史に触れる機会が多いからだ。

今から千年以上も昔、都であったこの地は、時代の流れに翻弄されながらも、多くの人々の手によって守られてきた。学校の歴史学習で訪れた法隆寺や東大寺、平城宮跡。柱の一本、瓦の一枚にも、積み重なった年月とともに、幾度となく繰り返された復原の努力が刻まれている。

数年間、奈良文化財研究所を訪れたことがある。そこでは、平城宮跡の発掘調査の様子や、長い時を経て発掘された瓦や木材の展示を目にした。さらに、復原の現場をガラス越しにのぞくことができた。机の上には、何百年も前の瓦や木材が整然と並び、職人が専用の道具で汚れをそっと落とし、欠けた部分を補っていた。その姿は、壊れた歴史のパズルを一つひとつ縫い合わせていくようだった。作業のゆっくりとした丁寧な手つきを見て、これほどまでに時間と根気を要するのかと、私は息をのんだ。静かな背中からは、文化財を未来へ託す強い使命感が、確かに伝わってきた。こうした努力を支えてきたのは、昔も今も、人々が分かち合った負担——すなわち「税」である。

例えば、国の「国宝・重要文化財等保存・活用事業費補助金」により、薬師寺東塔や法隆寺東院礼堂などの修復に、あわせて数千万円規模の費用が支出されている。さらに奈良県では、文化財の保存・修理、展示活用、教育資料の作成などに向け、数億円規模の予算が計上されている。

これらはすべて、私たちが納める税金から生まれている。文化財保護のための税金は、単なる修理費用ではない。そこには、人々の歴史や信仰、暮らしを未来へ残すという思いが詰まっている。もしこの支えがなければ、老朽化は進み、やがてその姿を失うだろう。その時失われるのは、観光資源や地域経済だけではない。千年先にまで届くはずだった記憶や物語も、静かに途絶えてしまうのだ。

古都・奈良は、先人たちの努力と税による支えがあったからこそ、今も息づいているのだ。税は「取られるもの」ではなく、「みんなで未来を守るために出し合うもの」だ。奈良の景色と文化財研究所で見た職人の姿が、それを私に教えてくれた。私たちが払う税金は、数字や書類の中だけの存在ではない。それは、風雨にさらされても凜として立ち続ける塔となり、金色に輝く大仏の微笑となり、文化そのものとなって私たちの心に残る。

私はこれからも、この町の歴史と文化を大切に思い、そのための税の役割を忘れずにいたい。そして、千年先の誰かが、今よりもっと鮮やかで豊かな景色を見上げられるように——税は、未来を守る力だ。